

せたかむい

年表で読む 古平の歴史

134

古平町役場総務課
電話42-2181
平成21年2月1日

狄(えみし)はアイヌのこと、アイヌの戸数は寿都から古平まで一五〇軒ばかりかと思われる。それより一二五年ほども経つてからの別な記録によると、

「古平には運上屋一軒、番屋二軒、鮒(にしん)小屋三十四軒、アイヌ小屋六十六軒、通算百三軒の漁場」とあり、むしろアイヌの戸数が増えている。

◇古平のアイヌの戸数

| | |
|----------------------------------|-----------------|
| 古平でのアイヌの戸数について | 古平でのアイヌの戸数について |
| はよく分かっていないが、大正年 | 代からの記録によると、大正一〇 |
| 後、平安京(現在の京都)に都が移つ | 年、北海道の戸数三八八五戸・人 |
| たが(平安時代)、それは、今からおよそ千二百年から千三百年ほども | 口一五九四一人で、後志支庁の戸 |
| 昔のことである。 | 数一〇二戸・人口三九五人 |
| その頃、朝廷の命令に従わない | 大正七年 一六戸 三五人 |
| 者、言うことをきかない者たちを | 同八年 一五戸 三四人 |
| 「エミシ」と呼び、「狄」や「蝦夷」 | 同九年 三戸 一二人 |
| という字を当てたが、やがて、現 | 昭和二年 二戸 一五人 |
| 在の新潟県辺りから東北地方に住 | 同五年 記録なし |
| む人たちの意味に使われるようになつた。 | |

戰前の小学校の教科書で、神話の中に出でくる「エミシ」というのは、東北地方に住んでいる朝廷に従わない者たちのこと、アイヌのことではなかつた。

※ 文政五年(一八二二)に調査

寛文一〇年(今からおよそ三四〇年前)、アイヌとの争いのようやく終つた頃、現在の北後志辺りのアイヌの戸数について、伊藤鉄之丞の記録した『寛文拾年狄蜂起集書』の中に次のようにある。

(書き換えた文字があります)

一、お正路(忍路) 広い澗(有り)、澗の中に小さい澗が三つ有り

その後鎌倉時代(八百年ほど前)、源頼朝の時代になると、「蝦夷」というのは北海道に住むアイヌの人たちをふくめて、異民族のことを目指すようになった。

アイヌの 伝承と記録 ③

1. 運上屋とアイヌ

◇北後志辺りでの アイヌの戸数

一、のな前(沼前) 潤有り
一、しゃこたん 家十七軒ばかり、
小川、狄あり

一、ほろもい(幌武意) 潤有り
一、ひくに(美國) 家二十軒ばかり、
かり、澗、川有り、
一、古平 家二十一軒ばかり
澗、川、狄有り

一、與一(余市) 家四十軒ばかり、
かり、川へ舟が入る、狄おと
な八右衛門、古城、石場有り、
五軒ばかり
一、もいれ(モイレ) 十四、

一、お正路(忍路) 広い澗(有り)、澗の中に小さい澗が三つ有り

東北北部や北海道に住む異民族

したという記録によると、

岩内

二五一・古宇 一二八

積丹

八二・美國 五四

古平

三四七・余市 五六四

とあるが、古平でのアイヌの記録は数人の口述か、先に紹介した梅野モンの手紙くらいのもので、全く記録などは残っていないと言つていい。①山口家にアツシ（オヒヨウの樹皮で織つたアイヌの上衣）があつたが、北海道開拓記念館に寄贈された。

◇運上屋の規定

場所請負制になつてからのアイヌは、ほとんどが漁業に従事してゐたようである。岡田家による、運上屋の規定と見られるようなどが記録にある。

（古い記録については難しい文字や用語が多いので、努めて現在の言葉に替えてみました）

一、正月元日より三日まで御祝儀但し、その年の状況により、番屋を見回りかたがた漁業の手配をする

一、雇蝦夷が運上屋に集まつたら、

一同に米三盆、外に鱗類少々差し遣わし、三日目に濁酒一人に

つき一盃を差し遣わす
一、平日飯三盃、夕方まで仕事をした際は濁酒一盃、特に骨折り仕事の時は外に濁酒一盃差し遣わす
一、支配人や番人が場所に行つた時は、一人につき清酒二盃、濁酒モロミニ升を差し遣わす
一、支配人が着いた時には、乙名・小使共に清酒一盃、濁酒一盃ずつ遣わす
※ 酒を盃（さかずき）に何盃（杯）というのがよく出でますが、この一盃というには、二合半ぐらゐの量ではないかと言われています。
普通のどんぶり一杯というところでしょうか。このような場面を描いた絵を見ると、確かにどんぶりぐらいの大きさの容器で飲んでいるようです。

安政三年（一八五六年）四月、箱館奉行は場所請負人に、蝦夷人の使用方法について決まりを定め、
場所請負人の守るべきことを次のように示した。
一、アイヌの使用については、前もつて詰所に届け、都合のよい時に召し使うこと
一、給金などは毎月晦日に勘定し

◇ラムシャのこと

ラムシャについて松浦武四郎は、その著『蝦夷葉那誌』（蝦夷はなし）に次のように説明している。

「ラムシャ」というのはアイヌの大

詰所まで差し出す。詰所より渡す。ただし運上屋で酒、飯などを与えることはこれまで通りとする。

一、使い古した物なども遣わす時も詰所へ差し出し、詰所より渡す
一、老人や子どもなどへ渡す物も同様とする。また懷妊中、死亡などの際の手当でも同様とする
一、ラムシャは勿論、全てアイヌへ遣わす物は詰所より渡すこととし、運上屋より直接渡すことはできない
一、綿織物などについても同様である
一、アイヌが暇を見て自分で稼ぎ、手にした魚・獸・野菜などなど、その他のものと交易したい時は詰所に差し出し、詰所より運上屋へ渡し交易を取り計らう
以上のこと違背の無いように申し付ける



（続く）

悦二の三人が優等をもらつた。喜ばしいことと感謝せねばならぬ。

▼三月一九日 (小雨)

2月号 (No. 231) カ む い か た せ

起床七時、いよいよ今日から幸治らは高商の受験日だ。好成績で合格でくるよう期待する。彼岸に入つて、いよいよ暖かく春景色になつた。子供らも湯タンポをけりだして寝ていた。今日は朝から小雨が降り出し、雪が消えること甚だしい。新聞によれば、探海丸の流し網で鯨六十尾ほど丸山沖でとれたとのこと。鯨大漁の声も今月中には聞けるだろう。町は漁夫が入り込み、ドロノキ辺から多くが浜へ下がつて来ているので、町中の通りも多く忙しそうに歩いている。私は店番。熊さんは屋根の雪下ろし、中庭は三回も雪を投げたが、それでもまたいつぱいになっている。今年のような大雪は本当に珍しい。今日は一日中小雨が降り、雪も消えて暖かいことだ。子供らは戸外に遊びに出ている。夕方より牡丹雪が降り出したが静かな空だ。明日は学校の卒業式だ。吉治と悦二は風呂へ行き喜んで帰つて来た。

私も卒業式に参列する。本年は三十五回、自分らが出てからもう廿八年が過ぎたのだ。卒業式もだんだん変わつてきて、今日が日進月歩の世の中、かくあるべしだろう。

さんは店の用事で板倉へ何回も行かく春らしくなつた。朝、一階の窓から遙か港を眺める。静かにカモメも飛び春らしい。太陽はキラキラと窓から差し込み、晴々として気持ちよい。熊さんは農園へ行き、こやし小屋の雪投げ、板倉など見回り一〇時ころ帰る。畑も随分雪があるとのこと。浜へ行きスケソを買って来て干す。一〇錢で一二尾とのこと。干したスケソは夏になつて子供らにやると大喜びだ。今日は彼岸のご馳走にオハギをこしらえる。コノさんも来てな

で小樽から来た。幸治は二十三日に帰省するとのこと。吉治らは保護者会評議員会があり行く。四年度の予算などを協議する。保護者は八百人ほどだ。児童の綴方書き方、図画などが展示していた

し暖かくなれば家にいないで遊びに出るのだ。電気会社の前の雪とヤブ長の雪を積み上げて、悦二、四郎に平チヤンらが雪合戦をやっている。子供時代の楽しみだ。八時頃には疲れたのかグツスリ寝ていて、意義ある式だった。十一時終り帰る。家では吉治、トシ、

▼三月一一日 (晴天)

昨日からの大吹雪、時化も今日は静かになった。海もなぎる。熊

は静かになつた。吉治、トシ、

卒業式、子供ら三人の支度で妻は忙しい。熊さんは入船町の田岸まで網十反を持参する。吹雪の中、

吉治は卒業生なので謝恩会があり、三時頃、ご馳走を貰つて帰る。吹雪はナカナカ止まず。夜、あちこちへ手紙を書く。

▼三月一二日 (快晴)

起床六時、日増しに日も長く暖かく春らしくなつた。朝、一階の窓から遙か港を眺める。静かにカモメも飛び春らしい。太陽はキラキラと窓から差し込み、晴々として気持ちよい。熊さんは農園へ行き、こやし小屋の雪投げ、板倉など見回り一〇時ころ帰る。畑も随

高野名手作さんの日々

（143）

當時の世相を見る

がなかなか上手なものだ。二階の裁縫室から海上を眺めると実際春らしい。今夜は全部の漁場で投網することだろう。今日の天気だと

大分雪も消えることだろう。父と吉治が雪山を崩している。今朝聞けば今部方で初練三尾・四尾獲れたと言う。

▼三月一三日 (春景色)

起床六時半、日は余程長くなつた。練漁期になつたので未明から人通りがある。今日も小春日和、上ナギだ。浜へ出て見るが練はない、スケソ、カレ網などが出たので、暖かい日を浴びながらスケソ外しなどをやつていて浜は賑やかだ。子供らは学校が休みなので、沢山浜へ遊びに来たりしているが、午後から熊さんと入船町の田岸まで網を檣につけて手伝いする。日中はかなり暖かく、ハイが日向に出ている。夕方浜へ出で見ると、建綱が一齊に投網している。これで浜も活氣づく。毎年毎年見る景色だが、こうして建て揃うのはよいことだ。もつとも何十年前からこれでもつている

▼三月一四日 (快晴)

起床七時、一日増しに暖かく凌ぎよい。先頃までは寒い寒いと言つていたのに、にわかに春景色だ。子供らは衣類を脱ぎ、シャツ一枚になって走っている。戸外で遊びのもいいが衣服や靴、たびなどぬらし汚してくるのには閉口だ。朝からの大雪で雪の消えること目に見えるほど。午後から晴れたが、

この雪で熊さんと倉庫の片付けをする。幸治、帰るというので子供らが迎えに行つたが戻つて来た。どうしたものか、明日あたり帰るのだろう。夜、彼岸の終わりなので仏前で読経す。八時頃、田清水の兄貴死亡の通知がある。若い人なのに惜しい、田でも実際氣の毒だ、早速弔いに行く。一〇時半頃帰る。

▼三月一五日 (雪後晴)

起床六時、昨夜よい月夜であつた。初練もあるかと思ったが更

にない。熊さんは田の葬式の手伝に行く。葬式は一〇時なので見送りに行く。田主人、妹さんが、悲しみのあまり老婆の出棺の際泣いているのを見て実際に氣の毒同情に堪えなんだ。老婆九〇歳まだ、長命して天益も頂いたが、重ね重ね不幸に会つては長命も苦労の種、長命必ずしも幸福ではないと思つた。四時骨拾いし五時から忌中引き。のち瀬戸さんの通夜に行く。大勢だったので、そこに居て通夜をした。九時半終り帰る。十六夜の月はこうと輝き、静かな海

田せねばならぬ。三時帰る。幸治、一時半頃小樽から帰る。高商受験も大抵大丈夫だと言つていて、受験者も多い事ゆえ一八日の発表あるまでは安心できん。午後五時、舟へ通夜に行く、大勢の人だ。一時帰る。港町の瀬戸おつかさん、五、六日前から不快のところ本日小樽病院で死亡されたとのこと。

田せねばならぬ。三時帰る。幸治、ヨ幾井に寄りいろいろ話しことだ。

時帰る。この日、スケソ船大漁、吉井などでは鉤刺網の沖揚げのよなケラ掛かり、大漁旗を立てて、吉井などもかなり獲れた。帝國議会閉会、古平町民の期待せる余市・余別間鉄道問題も、貴族院で審議未了になつたのは残念なことだ。

▼三月一七日 (快晴)

起床六時、今日もよい天気だ。

熊さんは田へ後始末の手伝いに行く。いよいよ春景色になる。浜は大層賑やかだ。本陣の浜は潮が引いて大勢の人が出ている、悦二、四郎なども遊びに行く。午後一時頃、瀬戸さんの葬式送りに行く。今日もスケソ大漁、吉井さんでは練場のようにモッコしよいしていれる。午後一時頃、子供らが磯から帰る。ノリ手籠に一つ採つて来た。

▼三月一八日 (晴後雨)

起床六時半、母の命日で和尚さんが来られるので、私も早く起きる。いろいろ手伝いする。熊さんは父と魚のこやしを檣につけ農園行

になつた。正午、和尚さんが来られ読経、いろいろ話しひ時頃帰られる。この頃からかなりの雨が降り出す。雪も消えるだらう。漁丸があちこちでチョイトイ獲れたらう。三月中に大漁を見たいものだ。高商受験、今日か明日発表とのこと、吉か凶か。夜八時頃から雨も止んで静かになつた。

▼三月二十九日 (時代 風)

昨日の雨は今晩から寒風になり、海は大時化になつた。店は風をまともに受けるので、板戸を三枚だけ開けておく。月末で熊さんは集金に出かけた。大時化で揚網した。子供らはこま回しに夢中になつてやつてゐる。こんな時代が実にのんきなのだ。小樽高商受験の発表のはずだが、今日もなんと案じている。明日は分かるだろう。

▼三月三〇日 (快晴)

起床七時 今日は風も静かで海はナギ、天気もよく春景色になつた。幸治 高商の結果如何と案じ

ていたら、タイムスと樽新に合格者の名前が出ていた。その中に幸治の名前もありよかつた。九時頃郵便で高商から入学許可書が届いた。幸治も大喜びだ。中学から百人ほど、商業から六〇人ほど、無試験三〇余人、合計で二百名合格だ。七百余人の中からだからよい方だ。午後四時頃、湯田さんへ行き火防組合のことにつきいろいろ話し、五時帰る。浜へ出て見る、

よいナギだ、今夜こそひと漁あるだらう。

▼三月三一日 (快晴)

起床六時、昨夜は静かであたから、きっと初釣揚がるだらうと思つてたがサッパリだ。三月中にまかない分ぐらいはあるだらうと思つていたのに、町の人は初釣の頗も見ない。文治は明日から始業なので、今朝八時半の富丸で小樽へ行つた。ついに初釣も食べれないで行つた。熊さんは集金に出かけた。午後から私の家の納屋こしらえをやる。幸治、午後から沖村へ行く船があつたので乗せてもらひ、伊藤先生のところへ卒業と合格のお礼に行つた。伊藤先生も大

変喜んで、三時間余りも話をして帰つて來た。今日はよい天氣で春らしい、夜になつても静かで、きっと今夜はあるだらう。火防組合の宣伝ビラを一〇枚ほど書く。

▼四月一日 (雨後吹雪)

祝聖会の例会日、三時半に目が覚めたが、早かつたので一眠りしたら四時半だつた。薄明かりで鳥がガアガア鳴いている。大急ぎで支度して出かけたら、何れも遅く私が一番だつた。和尚さん、昨日名古屋に行つたとて留守、例の通り読經す。高商に入つた幸治のお札やら、漁大漁を観音さんに願つた。吉厚さんの部屋で話しあつた。今日は新入生の登校日、ナツ子も行く。七時頃缶の一六歳の娘さんが死亡したと通知がある。兄貴が死んで九日目にまた死ぬとは何と氣の毒なこと。私は一〇時ころお悔やみに行く、なんとも可哀想なことだ。正午に帰り、自分で昼食をとることにした。熊さん九時頃、缶

時帰る。漁は更はない。雨は止んでミゾレになり海は時代になる。熊さん田へ手伝いに行く。五時頃缶の通夜に行く。今日は少し早く九時に帰る。

▼四月二日 (雪 時化)

起床六時半、昨日よりの時代、今日はチラチラ雪も加わつてまた寒中に戻つたよう。四月一日には珍しいことだ。しかし各地とも獲れないというのだから、まだ早も送りに来られた。可哀想なことだ。この頃より雪がますます降り出し吹雪になる。家に帰つたのは一二時半、昼食す。港町姉上来る。・兄さん、この度嫁さんを貰うこととしたとのこと、一日も早く皆さんを安心させるよう。来る五月一五、一六日、函館で火防大会があるので、ワタシニ出席しないかと本から話がある。函館へ行く可行かないか、考えてから返事をすることにした。熊さん九時頃、缶

の手伝いから帰る。聞けば入船町で今日、波の合間をみて刺網を揚げに行つたら鯛が掛かっていたと。浜は刺網、建網ともに俄かに大騒ぎ、三、四〇箱獲れたとのこと。浜は刺網、建網ともに俄かに大騒ぎとのこと。いよいよ鯛が来たのだ。

▼四月三日 (晴)

昨夜から練模様あるとて騒いだので、今朝こそと期待して目を覚ます。起きて聞けば入船町○山口半杯、その他刺網も五、六箱か一〇箱ぐらいも獲つたとのこと。何分待ちこがれた初鯛、しかも全道どこでもまだ見ない初鯛が古平だけ恵まれたというので、町は大いに活氣づく。私の家でも・から二尾、三三尾、阿部五尾、吉九尾、大坂五尾貰い、昼食に本年の初物をいただき。九時頃小樽十から初鯛の模様問い合わせある。小樽では初鯛一尾二十五銭で買って食べたとのこと。どこでも首を長くして練を待つているのだ。文治ら小樽で一五銭もする初鯛なら食べれないだろう。午後二時頃から昏髪模様あるとて浜は大騒ぎ、アチコチで獲れたことのこと。夜も皆

浜へ出て大漁を待つてゐる。暖かい南風が津軽海峡を越えて、北海道の鼻面をなでるように大きくなつて、今年も二月初めに水産試験場の探海丸が雄冬の沖で初鯛を三尾獲り、それから各地で鯛の便りを聞くことになった。それ以来、かたずをのんで冲を眺めていたが、初鯛で春の訪れを強く感じ、浅刺とした銀色の鯛が皿にのることを思い浮かべていた。それにしても鯛の訪れは例年に比べて遅かつた。

▼四月四日 (雪後晴)

一夜以来初鯛が来て、町はいいよ活氣づく。昨夜はナギもよしきつと大漁ならんと早く起きて浜へ行く。入船町前浜、沖村、山中辺りアチコチで漁、△二〇杯、〇二〇杯、その他入船方面の漁は刺網で一、三本ぐらはずつ獲つたという。合計で千五、六百石とのこと。今日もあちこち一〇数軒から初鯛を貰う朝からボタボタ雪が降つて、電線は太い棒のようだ。七時頃、**本**から電話で臨時に巡回することになり出かける。部落を見回ることになり、私は支店○と三人で、一条通りを廻る。九時に終り帰る。後コタツで

らハガキが来る、古平の練漁はどうかと案じている。浜へ出て見たがよいナギ、今夜こそ大漁ならんと皆勇んで出た。星は満天に輝き良夜だ。

▼四月五日 (快晴)

起床六時、今朝こそ大漁と期待していたが、薄い乗りであった。

沖村方面は割りに良く七、八百石とのこと。本日までの合計三千石ぐらいか。この上ナギの続く時に大漁になつてもらいたいものだ。

今日のところ岩宇地方もなし。この漁も積丹、美國、古平、余市ぐらいいのものだ。新任署長、点検する

とて火防組合からも立ち会つ。だから電話あり、火防組合の上申につき**本**さんと役場へ協議に行く

高野前組長、名達さん、湯田さんの三名を表彰することになった。
一〇時半帰る。今日は実によい天気だ。仕事で屋根に上がって、賑やかな海の方や四方の山の雪景色も眺めたがいい景色だ。春のポカポカした光りを浴びながら心地よい。これでひと漁あればなお気持ちはいい。子供らもコタツにあたるより日向ボソコがいいのか、屋根に上がつて子供の姿も見える。
幸運は雪消しやら子供たちと遊んでいる。今夜こそ大漁であります。

▼四月六日 (快晴)

た。

起床六時半、昨夜の暴風は随分強く恐ろしかつた。一二時頃までコタツで休み警戒していた。何事もなかつたので休む。今朝は疲れた。練漁も昨夜のダシ風で思われる。一日一日と日が経つがひと漁ありたいものだ。古平でもまだ初鯛のないところが沢山ある。だ。早く安心させたいもの。本つき**本**さんと役場へ協議に行くから電話あり、火防組合の上申につき**本**さんと役場へ協議に行く。だから電話あり、火防組合の上申につき**本**さんと役場へ協議に行く。

▼四月七日（寒風）

起床六時半、寒風が吹き、昨夜
来海は時化になつた。今朝、群來
村方面は大漁、外に崎長歩方一〇
数杯、そのた種金、熊木、渡辺など
とも獲つたとのこと。浜中は時化
で沖揚げもできない、新地方方面で
は買い鰯で賑やかのこと、一尾

とのこと、相坂まで入つて見る。
練を見て久、正治は大喜びだ。刺
網では少し漁場らしくなつた。こ
れだと一〇本から一〇数本あるだ
ろう。正午頃、悦三、四郎は沢江
の○一まで行き、熊さんから貰つた
とて練一〇尾ほどつないで持つて
くる。学校は今日から一週間休み
とのこと。

▼四月九日（快晴）

一鉢一厘でかなり売買された。そうだ。午後一時から火災予防の巡回をする。町はまだ練が不足、町民もイライラしているようだ。三時に終つて帰る。久し振りで風呂に入る。岩宇方面は本日まで更になし。古平六千石、余市一万石、美国五千石、積丹六千石ほど。

▼四月八日（快晴）

起床六時 昨夜はきつと大漁ならんと期待していたが、今晩まで道路を通る人の気配では左程ではないらしく張り合いかなく起きた。熊さんは今日初めてモツコシよいに出た。九時頃、久、正治を連れて浜へ出てみる。○一〇杯、囚五、六杯獲れたとのこと、その他の山中方面少し獲れたとのこと。囚などはひとつそりだ。刺網はかなり

日熊さんは〇へ行つたので、子供たち三三五五で、お

日熊さんは〇へ行つたので、子供らもモツコをしようつて行き、ホッケ、イカなど貰つて帰る。三杯ほど獲つたとのこと。午後四時頃からヤマセが吹いて時化模様になつた。

▼四月一〇日（雨）

起床五時半、昨晩来荒れ模様だ。

▼四月二日(快晴)

起 床 五 時 昨 晚 こ そ は 大 漁 あ ら
ん と 期 待 し て い た が、 今 朝 聞 け ば
サツ パリ、 ど う し た こ と だ。 入 舵
方 面 は 渔 が あ り、 一 こ と で は 一〇 杯 も
獲 つ た と の こ と。 ローソク 岩 付 近
も 痞 れ た と の こ と。 刺 綱 は 沖 の 方
が 掛 か つ た と の こ と。 水 温 は 六 度
ぐ ら い で、 昨 年 よ り 一 度 く ら い 低
い と い う が ま だ 望 み が あ る。 何 と
も 気 が も め る こ と だ。 今 日 は 珍 し
く 快 晴、 中 庭 に は ま だ 四 尺 も 雪 が
残 つ て い る。

四日頃には小樽へ行くので、夜具の支度などしている。妻も子供の世話から針仕事、なかなか忙しいことだ。夜に入りて雨ますます降る、暗い空で時化模様だ。今夜もまたダメか。



八
統
八



～積丹半島横断道路～

5

積丹半島横断道路の建設

◆積丹半島の背骨

古平・神恵内線・道道998号線は積丹半島中心部の山地を横断し、遠くに海を望みながら、積丹半島の脊骨ともいえる山々を望遠することができる。

峠付近には両古美山（八一四メートル）、泥ノ木山（九〇四メートル）、当丸山（八〇〇メートル）、さらに積丹岳（一二五五メートル）、並んで余別岳（一二九七メートルなどなど、連なる山々が美しい姿を見せてくれる。



トンネルを抜けた道路から見る景観はまさにやまなみ（山脈）、当丸峠付近からの眺めは山々が波のように押し寄せてくる錯覚にとらわれる。古平・神恵内両町村の境

にある、この標高六〇四メートルの当丸峠はそんなところにある。

◆当丸峠が幽霊写真で一躍有名に

←新聞紙上で報道され大きな話題を呼んだ写真・ちよんまげ姿の武士と女性が写っている
(北海タイムス 51.9.13)

地域住民にとって永年の念願でもあり、地域の生活に密着した積丹半島横断道路・道道998号線だが、特に有名な道路というわけでもなかつたが、この峠を一躍有名にしたのが『幽霊写真』騒ぎであった。

昭和五一年、道路工事の最中に、施工業者が工事の写真を撮影したところ、その写真にちよんまげ姿の男とその時代の女がいつしょに写っていたのである。

これは何かの幽霊である、といふことで町中が大騒ぎになり、新聞やテレビでも報道されるとたちまち世間の話題をさらつた。

古老の話しによると、戦時中のこと（後の調査でそれは昭和一六年九月と分かった）、営林署による六志内林道の草刈り中に、偶然鎌の先に当った頭蓋骨を発見し、警察に届け、医師の鑑定の後禪源寺の納骨堂に納められたという。当時を知る人の話から、頭蓋骨



が発見されたという場所は、はからずも今回の写真が撮影された場所とほぼ同じであることも、町民の憶測を呼んだ。

新聞などでも広く報道されたことから「幽霊の出る峠」として、万が一のシャッターチャンスを狙つて写真マニアが殺到したことも

あつたが、完成した快適な道路と周囲の雄大な風景美に、今ではその噂を思い出す人もいなくなつた。

♦998号線の使命

当初は開発道路として着工され、一八年にわたる歳月と、総事業費一〇七億七百万円を投入して完成し、昭和六一年四月一日付けで北海道に移管された。

この道路の完成により、それまで神恵内村から小樽市までは、泊村、岩内町を経由して国道5号線に出る道路以外にはなかつたが、

積丹半島の中央部を横断し、古平町を経由することから大幅に時間も短縮されると共に、観光道路として大きな期待が寄せられるようになつた。

特に泊原子力発電所の関係から、

泊・神恵内地区の住民約四千人の緊急避難路として、重要な道路とされていることから、通年の開通に各種の対策がとられている。

万一の緊急避難に備えて、古平高校はその一時的な避難場所として指定され、受け入れのための施設が図られている。

—この項終り—

ワラビタイ道路の改修

♦昔からの交通路

古平町浜町から古平・神恵内線を進むと、古平川の上流、泥の木橋から廻り淵の美しい渓流を眺め、一キロほど行くと道は二股になり、右手に当丸峠へ続く六志内橋が見え、そのまま進むと道路は旧稻倉石鉱山へと続いている。

この辺りは廻り淵から堤の沢と

古平町浜町から古平・神恵内線を進むと、古平川の上流、泥の木橋から廻り淵の美しい渓流を眺め、一キロほど行くと道は二股になり、右手に当丸峠へ続く六志内橋が見え、そのまま進むと道路は旧稻倉石鉱山へと続いている。

この辺りは廻り淵から堤の沢と

課題となつた。

折から神恵内村までの道路

建設が着工されていて、六志

内地区への道路改修はかなり

進んでいたが、その登り口の

堤の沢・稻倉石間に

車の通行に難渋する道路であ

つた。

昭和38年、この間のタモギ

タイ道路の改修工事が着工さ

れ、道路がある程度整備され

た」とから、今まで稻倉石鉱山か

ら鉄索(通称ナベ)と呼ばれていた

によって港町の貯鉱所まで運ばれ

ていたマンガン鉱石が、全てトラ

ック輸送に切り替えられた。また、

道路が整備されたことから、今まで、中央バスが一日四往復のバ

スの運行を始めた。

このタモギタイ道路の整備によ

り、この道路に続く踏み分け道と

して、古くからあつたワラビタイ

地区の道路の改修が検討され、ほ

とんど人が入ることもなかつた奥

地の開発が脚光を浴びてきた。

森林資源があり、稻倉石鉱山に

繋がる鉱物資源の埋蔵も考えられ、

急峻な山々に囲まれているように

見えるが、意外と場所によつては傾斜の緩やかな平坦地もあり、ワラビタイ道路の改修工事が着工さ

れた。

— 続く —



町内の学校探訪

17

古平小学校

◇ 古平学友会結成

僻地であった古平町からも、漁の繁榮による経済的な余裕から町外の上級学校に進学するものが増え、小樽や札幌の公立・私立の中学校や実業学校への進学者が次第に多くなってきた。大学への進学者はまだいなかつたが、女子の進学者もみられるようになった。

休暇になると故郷へ帰る生徒も多くなり、中等学校以上の卒業生と在学生との親睦を図り、向学へのいっそうの意欲を高めるため、大正八年、古平学友会を結成した。

事務所を入船町山口金治宅とし、集会所を古平尋常高等小学校とし

た。会の規定に、

目的

第一条 本会は本郡出身学生相互の親睦を図り、身体を鍛錬し精神を陶冶し、綱領の主旨に協調しこれが促進に努め、本郡発展の先覚者たらんことを目的とする。

組織

第三条 本会は左の資格者を以て組織す

A 正会員 中等学校及び専門学校に在学中の者
B 特別会員 本郡出身者にして

中等以上の学校に入学せしことありし者

C 名誉会員 本会の目的に協賛

◇ 校舎増築

大正一〇年一〇月、新校舎増築の地均しが終わつたが降雪期に入り、翌大正一一五年五月、融雪を待つて校舎増築工事に着工した。建築に支障のある御真影奉置所を校舎の前庭に移転し、増築工事は八月竣工した。

校舎は一〇月一〇日、後志支庁長をはじめおおくの来賓も参列して落成式が行われた。増築工事の内訳は次のようであつた。

工事内容
一、御真影奉置所移転 一棟
二、校舎増築木造二階建 二棟

し、本会の事業を援助し会計維持を図る者とあり、事業として

体育部、野球部、武術部、庭球部、競走部、水泳部、旅行部などをおき、会長に仲谷勇五郎、副会長に関口道三郎を選任した。毎年八月の休暇中に総会を開き、正会員と贊助会員の野球試合を行つたりしていたが、当時は上級学校へ進学することが裕福な階層と見られていて、一般町民との交流はさほどなかつたようである。

在来建物延べ面積
一、四六一 リ

合計延面積
三、八七四 リ

請負金額
本工事総経費 六四、〇〇〇円

この工事の設計は、従来の設計書に基づき設計したものであつたが、建前の時に、一階の床が従来の床より六〇センチほど高くなつていてそこに段を作つた。

この増築工事に当たり、工事費を寄付した幕目善次郎ほか五一人と、沢江北斗団には褒賞が与えられた。また、古平尋常高等小学校同窓会が、増改築記念同窓会出資金として、男子一円、女子五〇銭を集めている。

一、職員玄関木造一階建 一棟
一、生徒昇降口木造平屋 一棟
一、小使室兼宿直室平屋 一棟
一、雨具置場移転改築 二か所
一、運動場増築平屋建 一棟
一、便所増築及移転平屋 一棟
一、渡り廊下平屋建 四棟

旧校舎の中央に増築された職員玄関の前、車廻りの庭造りには北

斗団が労力奉仕をし、庭木の植栽や移植、手入れなどをし、校舎前

面の景観が整った。

※ 古平小学校跡地に建設された文化会館の広場、句碑などの近くに立つてある大きなアカツチは、その時に植えられたものである。

落成に当つて平田リキが、児童用図書を五六冊寄贈し、大正十三年褒賞が与えられた。

落成式に当つては、記念行事として児童作品展覧会、古平農業会主催のリングを中心とした農産物評会が開かれ、夜には児童も参加し、男・女子青年団員による祝賀ちようちん行列が行われた。これら行事に引き続き愛國婦人会古平支部総会や、古平処女会発会式などが行われた。

また、古平尋常高等小学校増築工事費に充当するため、町債三万円を起債に求めていたが、寄付金が予定以上に集まつたため、次のように町債議決の取り消しの議決をした。

町債議決取り消しの件
大正十一年一月二十八日議決

経たる町債を起すの件は之を取り消す

大正十一年六月六日提出

古平町長 三上良知
(理由省略)

◇ 学校経営で表彰

これより以前の大正六年、赴任した中村重次郎校長は、大正七年八月、札幌区で開催の開道五十年記念博覧会に『学校経営の方法及び成績』と題する論文を発表し、銅牌を受賞し、後に大正二年二月、次のように表彰された。

古平尋常高等学校校長
中村重次郎
表彰状

多年本道小学校教育に従事し勉励其職に尽し成績見るべきものあり仍て目録の品を授け茲に之を表彰す

大正十一年一月十一日

北海道厅長官
正四位勲二等 俵 孫一

◇ 新地分教場新築落成

大正二年一月、旧校舎の運動場の雪下ろしをしなかつたため、運動場が倒壊するという事故があり、幸い死傷者はいなかつたが、

三上町長は町会で陳謝した。
そのときの町会で、校舎が腐朽化された。同時に群来小学校の新地分教場への統合案も提出されたが、群來部落民の陳情もあり、新地分教場の増改築にはそれらの事情も考慮し、適当な場所に移転すること。

は卒業生、在校生のうち成績優秀な児童に、次のように賞を与えていた。

一、学業優等、操行善良に付き賞せられる者

二、学術優等に付き賞せられる者
三、操行善良に付き賞せられる者
四、学術進歩顕著に付き賞せられる者

五、一か年間勤勉に付き賞せられる者
六、か年間及び八か年間精勤に付
き賞せられる者
この外学級役員全員に保護者会から賞が与えられた。

八月八日より着工し、竣工間近の一月一日昼前、新地分教場近くの民家から出火し、分教場と付属の教員住宅共に類焼した。児童は新校舎が出来るまで本校に通学した。

一二月一六日、新地分教場新築落成式が行われた。分教場は從来

一、二年生だけの一学級であつたが、新築校舎には群来小学校も統合になり、四年生までの四学級編成となつた。

落成式では、新築記念としてオルガン(時価二五〇円)一台を寄付した新地町泉ユウ、土地寄付者の藤沢勇蔵、高野常吉、高野名石藏に褒状と副賞が授与された。

※(新地分教場については、先の211号～214号の『新地分教場』編に詳細を記載していま

とに決定した。
その後、移転の場所は、群来村と新地町の中間ということに決定したが、途中変更の必要に迫られ、新地町藤沢勇蔵、浜町高野常吉、浜町高野名石藏からの寄付による土地と、国有地の無償供与を得て地均しをした。

大正十一年一月二十八日議決

ヘ続く

<11>

四つの部屋

大澤文子

朝の空の色も和らぎを見せ、背に受ける陽さしもニンニクよ。猛暑もすぎ、初冬の季節を迎えると、なんとなく真夜おそくまでベンをもつ時間の多いと。

あくそん時、いつも思い出すのは興味津々、身を乗り出す思いで頭の中に詰め込んで帰つて来た下女史の講演会のこと。

今でも忘れる事はない。背の高い外人並みの下女史は、ベージュのワンピースに赤いバラを胸に挿し、終始に「やかに笑顔をたやす」とはなかつた。

開口一番「みなさまーん！ 分かりますかアー女性の心の中にはネエ、『四つの部屋がある』とを存知ですか？」「えうなに？ 広い会場にギンシリつまた女性達は一言も發しない。

もちろん『四つの部屋なんてネエ』役者になることも「女性の魅力」とし

会場の女性達はお互いに顔を見合わせ、ヒソヒソとささやくのみ。

いくつもの疑問が頭の中をかけめぐる…と、もう手を高くかげた女史は声高く、「ひとつめの部屋は

ネエ『愛』でしようね。次の部屋は『誠』そして次の部屋はねエ『秘密』」ということ、最後の部屋はねエ『秘密』の部屋であることを存知ですかア？」会場は一瞬ざわめく。だが声をだすものはない。

「最後の部屋はネエ、親しいお人であろうとも絶対に足を踏み入れることは出来ないの…」と、女史は声高く言う。だが今更うなづく」ともあるまい。

「秘密」の一つや二つ、心の奥底にもたない女性なんて恐らいくらいである。

「秘密」の一つや二つ、心の奥底にもたない女性なんて恐らいくらいである。

ながい人生において、時には道化

役者になることも「女性の魅力」とし

て「大切な秘法と言えよう。

一時間半もの講演を聴いて、何かしらフーッと心中に小さな勇気の渦が…。否めない事実であろうか。まあ秘密の部屋のメモ帖にこう

そりメモする事項も楽しいと思う。のでも時にはメモ帖のある一ページをそつとちぎりある人に手渡す。

「ニコロの若さ」「ニコロのおしゃれ」に徹するこれが「女性の魅力」であろう。

またある先生の提唱された『三角論』も掲げてみよう。

一、汗かく、字を書く、恥をかく

一、適度の運動をして汗をかく

一、文字を書いて脳細胞に刺激を与える

恥かくは…いい年をして…と引っ込み思案にならず、新しい異質の

ものにでも挑戦しろ！ という」と。のよし！ 今年はこの線でゆこう！

立冬がすぎると駆け足でやつてくる冬…もり…。

窓辺の梅鉢には、来む春を待つが

また現在は所々に女性のための

会合があり、ダンス、美容体操等々、女性をひき寄せる数々の楽しい会

合所も設けられてるので、大いに活用し若さを充分に保つてゆきたるもの。

転校　人間を育てる学校

葛 西 庸 三

私は小学校を三度変わった。一年生に入学した時、同級生は二十四人で、全校児童は百人を超えていたと思う。それでも複々式の二学級編成であった。だから一つの教室に六十人近くの子ども達がいたことになる。立錐の余地もない教室で、よく過ごしたものだと思う。

教員は二人で私達の受け持ちは校長だった。

四年生になつて間もなく父が病死し、長兄が母の猛反対を押し切つて農家を止めた。その秋に室蘭に近いY町へ移転した。私はY小学校に転校した。

転校して間もなく、近くに住む級長をしていたHという餓鬼大将の家来になり、新聞配達の手伝いをしたり、ある時は悪さの下働き

をした。当時も苛めはあつたが私はボスの保護下でちよろちよろ毎日を過ごした。

五年生の暮れに、羊蹄山麓のK町へ移つた。

K小学校は前のM小学校より規模が大きかつた。担任が出張して自習時間になると、真っ黒い顔をした体のでつかい餓鬼大将のYの天下になつた。机は二人用で、私の席はほつそりとした綺麗な女の副級長の隣りだつた。Yはやつからんで、「お前はててなじ」だべ。きたねえツラしやがつて」とみんなの前で私を罵つた。誰もかばつてくれない。腹の中で煮えくり返る思いをしながら堪えた。そして、いつか仕返ししてやるぞと、腹の中で思つた。

そんな思い出があるものだから、

葛西庸三

娘が四年生になる時、私の異動が決まつた。私と妻は何日も前からそれとなく、転校すると楽しいことが一杯待つてゐるよ、と言つて娘の心に転校を受け入れる準備をさせた。

四月、娘は管内一大規模な学校へ移つた。しばらくして娘は朝になると腹痛を訴えた。

妻が病院へ連れて行くと、医者はどこも悪くない、ストレスだろうと言つたという。

活発で男勝りの性格だと思つていた娘の心の奥に、繊細な感情が潜んでいたことを知り、妻と私はそつと眼を合わせ驚いた。

娘は運動会で活躍し、仲間に存在を認められてからすつかり立ち直つた。

六年生になる時、娘は三度目の転校となつた。農村地帯で全校児童が百人たらずの小規模校であつ

自分の子どもにはなるべく転校させたくないかった。

併し、私の転校に伴い、娘は三回、息子は二回、小学校を転校した。

そんなある日私は床屋へ行つた。

女主人が一四年生のM男が、余所者を当選させたら駄目だ。対抗馬を立て落すべ、と言つて仲間を集めていますよ、と話してくれた。

M男は地域の中で力のある土建会社の息子であつた。案の定、娘

の対立候補として、無口で大人しい四年生の女の子が立候補した。

常識的に考えて、娘の優位は動かなかつた。

いざ開票になつてみると、票は一進一退を繰り返し、娘は辛うじて一票差で当選した。

余所者を排除するべ、といふ男の呼びかけに三年生と四年生が同調した結果だつた。

地域の深い意を感じて懶然とした。私は四年生の担任になつた。

一学期になり、娘は仲間に押されて全校児童会の書記長に立候補した。

始業式が終わつてから息子の担任が私の側に来て、

「やあ、あなたの息子さんは凄い

短歌

古平町岬短歌会

ふるさとの元日の朝のびをり身内の居なき年を迎えて

海浜（はま）護るローソク岩の律率しさよ寒の荒波碎け舞ひ散る

池田テル
泉清三

夜明け待ち両手ひろげ深呼吸しつつ見上ぐる空の明るむ
久々に仲間らと来し温泉にこもごも語り一夜を宿る

金子寿子

搾乳の手順ききつつ両手にて真似る幼なの満面の笑み

鈴木時子

夕暮の道に出会い施設の人振り向く仕草いとしく思ふ

玉谷美都子

一年（ひととせ）でこんなに自分を変へるとは年を重ねて改めて思ふ

坂本信子

如月の西空に今し沈みゆく大き満月明けの色もつ

丹後初江

盆梅の花びら白く四、五輪を小さく咲きていとほします

堀典子

ね。自己紹介の時、父は教頭ですがぼくには関係ありません。宜しくお願ひします。て挨拶したんですよ」と言つた。家に帰つて息子

んだよ」と言うのである。

聞くと、「担任の先生が、何回も教頭の息子だ、というもんだから、若し苛めの原因になつたら困ると思つて、父と関係ないって言つた

なる程、新しい仲間の中でも生きて行く息子の知恵か、と私は、胸の

中で溜息をついた。

振り返つてみると、私と娘と息子の転校は、つまり、人間を育てる旅だったのではないのか、と思

うのである。

私の一音



剪定をつづけ一本立てし菊日ごと膨らみ大輪に咲く

寺田カツ子

友達からもらったのが秋菊でした。霜に強く九月につけた蕾を何回も剪定し、一本の茎に一つの蕾とし、十月中旬頃には咲き始めます。雪降る前の貴重な生花です。この季節が一番好きです。

× × × × ×

仲谷喜美能

毎年飯ずしを漬けていた母に「お前もメモしなさい」といわれたことを思い出しながら、送られて来た浜の味をなつかしく噛みしめています。

悠

雜詠〔三月号〕

主宰 水見壽男

古平俳句会

奇岩より落ちる水音渓紅葉
日矢降りて深き樹海の紅葉濃し
雁の棹はぐれし一羽加はりぬ
一夜にて斯く濃くなりぬ崖紅葉
輝きのなき波に聴く秋の声
月影を千々に碎きて渓早し
海の青空の青さやいわし雲
足音も絶えて今宵の無月かな
島武意や渚百選月の波

越野清治
山口悦子
越野敏雄

流れ藻を乾し遊ぶ秋の風
秋の声しばし道連れ静心
残照に影を落して雁渡る
山々が紅葉の衣競ひあふ
石垣が朱色に染まる葛紅葉
ファインダー收めきれずに谷紅葉
初冬や風吹きあげて浜の道
冬海に浮き寝のごとく星の屑
荒海に出でし船追う冬鷗
打ち合ひて鳴りし冬潮岬煙る
風音が転ぶ枯葉に従いて行く
秋風の朽ちし番屋を吹き抜ける
秋風の旅愁寄せくる岬かな
沖よりの潮にまぎれし秋の声
秋風の運びし風の便りかな
寄る年の波に揉まれし秋の暮
朝寒の船音鈍く鈍く聞く
還暦も米寿も拾ふ木の実かな
風筋に応へて落ちる木の実かな
山容のくつきり見せて秋の風

堀典子
渡辺嘉之
室谷弘子



悲 涛



海荒れて古色蒼然冬の里 外山俊久
この年もやつと終りて除夜の鐘

冬帝や連峰すでに真白なる 越野清治

涸滻や波の荒さは止まずあり

山脈の白着て眠る北の国 山口悦子

新巻の鱗光るを贈りけり

冬ざれや上架の船も浜の景 越野敏雄

北キツネ無言の技の宙を翔ぶ

通院の一日終りて暖炉燃ゆ 大和田絵伊

孫達も七五三とて盛装し

マフラーをぐるぐる巻きに友来る 高橋重子

静寂や山峡の宿霜けぶり

俳句
古平俳句会

(No. 231) 2月号

| | |
|-----------------|-------|
| 水際を漂つてゐる木の葉かな | 越野 清治 |
| 師の句碑へ冬濤音のくり返し | 斎藤波留 |
| 声荒げ岩に囁みつく冬の涛 | 山口悦子 |
| 才ホーツクの冬濤碎く千疊岩 | 越野敏雄 |
| 初雪の汚れ知らざる美しさ | 大和田絵伊 |
| 諸々の身じろぎ鉢き著ぶくれて | 高橋重子 |
| 著ぶくれてをり登校の子等みんな | 外山俊久 |
| 冬日差し幾万杉の木立かな | 堀典子 |
| 初雪の便りはいつも北の尾根 | 渡辺嘉之 |
| 笛鳴や賑はひ出づる船の音 | 室谷弘子 |
| 雪雲の低く海原押さへゐる | 仲谷比呂古 |

<15>

▽早くも初夏を思われるような好天に誘われ、国道を外れて漁港を通つてみると、休日でもあり、岸壁には釣竿が林立? と言えばちよつと大きさですが、仲間や家族連れの太公望たちで賑わっていました。漁船は繋がっていて漁師の人影も見当たりません。車の音が聞こえるくらいでまことにのどかな漁港風景——というより寂しいような漁村風景でした。何となく見ていたら、近くの人の竿に当たりがあり大きく弧をえがいています。周りの人も見ている中で慣れてないようなぎこちない格好でしたが釣り上げました。まあ中ぐらいのホツケで、周りの人も「ホオー」という顔をしていました。私もちよいちよい港を通り釣り人の姿は見かけますが、実際に釣ったところを見たのは初めてのことです、私も思わず「ホオー」といつたところでした。

▽古平町出身の詩人としてつとに著名な吉田一穂については、町内にも詩碑や記念碑などがあり、資料室も備えておりますが、書道愛好家の間では作品作りの題材としての人気が依然として高いようです。先日も東京から毎日展に関係する書家の方が札幌の知り合いの車で見学に来られました。一穂の詩は難解ですが、それを書として表現するところに制作意欲が生まれ人気があるようです。夏には一穂の詩を題材にして札幌市で個展を開くとのことです。▽今まで文化会館にレンタルの輪転機があり、町内の団体などにも広く利用されておりましたが、四月末から撤去されました。『せたかむい』もこの輪転機を利用して、手作業での折込みなどもその場所でやつておりましたが、今度からは印刷が役場になりますので行き来に少々不便を感じております。まあ仕方がありません。▽二月頃から石狩湾での「ニシン」漁が、近年になく豊漁で大変話題になりました。資料も描きましたので掲載する予定でしたが次号にしました。時季を失したようですが、むかしの古平のことを知る上でも役立つものにしたいと考えております。

▽毎号のことで恐縮ですが、資料をあれこれひっくり返しているばかりで、発行のほうもすっかり季節がずれてしましました。仕事に快適な時期ですので、追い着き追い越せでなんとか挽回と思っているところです。

古平町史年表

昭和41年 (1966) ~続き

9/1：古平町自衛隊協力会総会が開かれ、会長に岩間与一が再選される

11/1：自衛隊俱知安駐屯地部隊音楽隊が新地町から浜町中島グランドまでパレードをし、のち古平小学校体育館で演奏会を開く

11/13：古平漁業協同組合事務所と市場が新築し、落成式が行われる

12/2：浜町に二階建て公営住宅が建設され、古平町公営住宅入居者選考委員会が開かれる

12/4：古平中学校裏の古平砂利採取株式会社施設の竣工式が行われ、操業を開始する

12/1：新生婦人会創立15周年記念式が行われる。会長高橋まつ

昭和42年 (1967)

2/23：降雨により急激に融雪が進み、町内の各河川が氾濫し町内各所で増水や浸水騒ぎが起きる。稻倉石地区では165戸600人余りが孤立し、町役場に水防対策本部が設置される

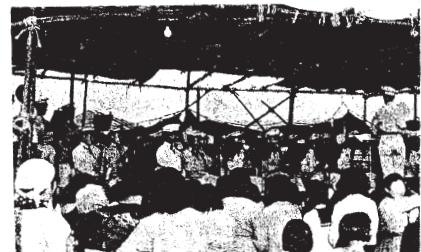
同：古平町に災害救助法が発動され、自衛隊俱知安駐屯部隊が災害の著しい稻倉石地区の救難活動に当る

2/24：事業の合理化により古平森林組合と余市森林組合が合併する

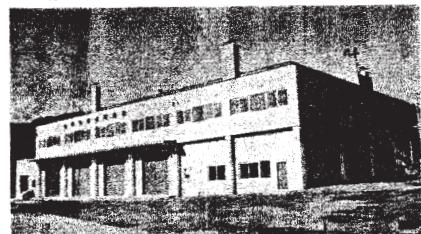
3/3：永年にわたり地域の消防活動に貢献したとして、古平消防団長皆松勇助が藍綬褒章を受章し、同23日、消防団や有志により受章記念祝賀会が開かれる

3/16：余市・古平森林組合設立委員会が開かれる

4/1：古平町条例により『古平町史編纂室』が設置される



↑ 新地みどり公園での演奏会



↑ 新築の漁協事務所と市場



↑ 賑わった協賛記念の売店



↑ 被災した稻倉石地区住宅街



↑ 優勝の丸山町内会チーム